

# いたち川とその景観

朴木 英治

## いたち川の由来

いたち川は、作家宮本輝の「蛭川」の舞台として紹介され、映画化もされました。

映画の中では、いたち川の源流は森の中になっていましたが、実際のいたち川は、富山市と大山町の境界の富山市西の番・大山町馬瀬口地内で常西合口用水から分岐して始まっています。周囲は開けた水田地帯で、晴れた日には、常西合口用水に水を供給する常願寺川の源流域となる立山連峰もよく見えます。いたち川の上流区間は農業用水として利用されており、名前も清水又用水と呼ばれています。

いたち川だけでなく、常願寺川と神通川に挟まれた富山市の市街地を流れる用水や河川の多くは、この常西合口用水から分岐したものです。また、富山市の水道水もこの常西合口用水の水を源水として利用しています。さて、いたち川はこの起点から神通川に合流するまでわずか15kmほどの長さですが、川の様子から最上流の用水区間、上流区間、中流区間、下流区間の4つぐらいに分けることができます。以下に川の様子を簡単に紹介します。

## 最上流部の様子

最初の用水区間は起点から太田橋（富山市太田地内）あたりまでで、ほとんどの部分は側面も底面もコンクリートで作られています。

このあたりは常願寺川扇状地の扇頂部に近いために地形の傾斜も急で、この傾斜を和らげるため、所々に階段状の落ち込みが作られています。それでも、いたち川の中では水の流れの速さが最も早い所です。この流れの速さと、底面も側面もコンクリートできていて水の勢いをしのぐところがあまりないことから、生き物にとってはたいへん住みにくい場所で、水生昆虫などは側面や底面のコンクリートに着いている苔の中に住んでいます。もちろん、人間も万一落ちると流されてしまって用水からなかなか出ることができないと思います。ご用心。

また、この用水区間のもう一つの特徴は、流れ下る途中で水田や用水に水が分けられるため、普通の川とは反対で、下流に向かうにつれて水量がどんどん少なくなっていくことです。

## 上流区間の様子

次の上流部は太田橋から清流橋（富山市本郷・山室地内）にかけてです。最近の川は洪水防止のために護

岸が強化され、鋼矢板やコンクリートで整備されていますが、このあたりのいたち川の土手は昔の川の様子をそのまま残す土の土手で、川の中までヨシなどの草が生い茂っています。このあたりを流れる水の量はいたち川の中で最も少なく、生い茂ったヨシの間を水が蛇行しながら流れています。

人間にとっては草が茂ってちょっと川に近づきにくい様子ですが、様々な生き物にとっては良い環境になっています。川の中にまで生えているヨシの根元などを隠れ場所にしてタカハヤなどの魚が住んでいます。一方で、先ほどの用水区間やこの上流の区間はまだ下水道整備が進んでいない所が多いので、生活排水による水の汚れが出やすい区間です。

## 中流区間の様子

中流部はちょうど市街地にあたり、清流橋から今木橋までの間です。この区間の中で、特に、水神橋から雪見橋にかけての区間では護岸からのわき水の流入が多く、流域の民家の井戸も地下水の圧力で地表面の上まで水が噴き出る自噴井じふんせいが多く、この井戸から出た水もいたち川に流れ込んでいます。

さらに、富山の名水に指定されている石倉町の延命地蔵の水も雪見橋の近くにありま。この区間には水草が多く生え、しかも、湧水の存在を示すバイカモも生えています。明るい緑色の水草がそれです。また、魚もたくさんの種類がこの区間で見られます。

## 下流区間の様子

最後の下流部は、今木橋から神通川合流点までで、松川や赤江川などのいたち川と同じ位の大きな支流が合流するため、川幅が急に広くなり、流れる水量も多くなります。また、水の流れも少し緩やかになり、川底には砂や土がたまるようになってきます。四ツ屋橋のすぐ下流には水門が作られ、神通川に排水できるようにしてあり、水門もたいていは開いているので、この場所で神通川といたち川が繋がった状態になっています。

市街地では降った雨が地面にしみ込まずに、ほとんどが直接川に流れ込むため、少しまとまった雨が降ると川に流れる水の量が一気に増え、時には洪水を起こすこともあります。この洪水を防ぐためにつけられたのがこの水門です。

（化学担当 ほうのき ひではる）